

130周年記念号の発刊に寄せて



取締役
常務執行役員
技術責任者
来住 晶介

進取の精神

OKIの創業者である沖牙太郎が、前身となる「明工舎」を設立した1881年から130周年を迎えるにあたり、本号を130周年記念号として発刊いたします。OKIテクニカルレビューは、50周年の節目として1932年に創刊した『沖電気時報』に端を発します。創刊にあたり、当時の押田取締役技師長（後に常務・専務）は、「一日怠れば千日の悔いを残す」と述べて、その先の厳しい研究開発と新製品の競争を予見し、「技術の沖」を宣言しています。このような思いは、創業者、沖牙太郎が目指した新たな時代に必要な新技術としての通信技術を独自に開発し、社会に提供するという「進取の精神」に支えられています。以来、今日に至るまで、『沖電気時報』から『OKIテクニカルレビュー』に名称を変更して「技術のOKI」の象徴として多くの新製品や新技術の成果を発表してきました。次の時代においても引き続きこの精神を受け継ぎ、より良い社会の実現に向けた技術を発表し続けていきます。

OKIの技術と新たなサービスへの挑戦

当社の創業に際した沖牙太郎の言葉である、「世運の趨勢を察するに、文明の進歩は駉々として留まるところを知らず、就中電気の応用に至っては、到底測り知るべからずものがある。」は、今日の情報通信の社会的な役割を予見し、技術の重要性を的確に指摘しながら、これから創業する電気製造業が日本の発展に欠かすことができないという思いであったことを表しています。そして、独力で国産初の電話機の開発に成功しています。この時代、電話網の整備もままならぬ時代に、電話機を製造することは破天荒な振る舞いとも受け取られましたが、警察などの先進的なニーズに迅速に応え、社会インフラへの貢献をいち早く果たしています。その後、プリンタ（軍用携帯印字装置）を製品化し、これまでのドイツ製の装置から国産装置への移行を果たしました。このように独自に技術を極め、開発する精神は創業以来の伝統となっています。同時にOKIの特徴の一つは、社会インフラの維持発展への貢献です。特に、第2次世界大戦後に果たした通信復興への貢献は、その後の日本の発展に大きく寄与



沖 牙太郎



沖電気時報創刊号

したといっても過言ではないでしょう。2011年3月11日に起きた東北大震災は、この戦後にも匹敵するほどの破壊と悲慘をもたらしました。OKIは、これまでに長い歴史で培った社会への貢献という役割をこのたびの震災の復旧と復興に果たしていく所存です。

OKIが創業以来関わってきた情報通信分野は、留まることを知らない技術の発展と社会への普及が続いています。特に最近、導入コスト・スピードなどの観点から、SaaS (Software as a Service) に代表されるように情報通信機器を所有することから、特定のアプリケーションやソリューションを利用すること、サービスとして受ける形態へとユーザー側のニーズが大きく変わりつつあります。本号は、これらのソリューションやサービス、これらを支える製品や技術について、OKIの取り組みを紹介しています。電話器製造からはじまり、交換機製造で大きく成長した当社は、その技術力を礎子にして多くのお客様との関係から多くのアプリケーションに関わってきました。こうした長年の蓄積が独自のアプリケーション構築力につながり、新たなサービス事業へと発展し、2010年度にソリューション&サービス事業本部を設立して、新たな社会ニーズに対応するOKIらしいサービスへの取り組みを開始しました。今日、ITインフラは企業活動でも、個人の生活でも不可欠となり、全ての情報がITネットワークを通じてやりとりが行われる時代が訪れつつあります。また、「Internet-of-Things」の言葉に代表されるように、全てのモノもITネットワーク上に存在し始めています。OKIは、130年の歴史の中で培った情報、通信、メカトロニクス分野などでの多くの基盤技術、製品、システム構築、業務ノウハウをベースに、このような時代に求められる多彩なサービス、社会インフラを生み出していきます。本号の記事から、次の時代に向けたOKIの製品と技術の取り組みをご理解いただき、これからのOKIらしいサービスの息吹を感じ取っていただければ幸いです。 ◆◆